

境谷遺跡 第1次発掘調査 概要報告

—三重県鈴鹿市国分町字境谷 所在—

2007年 3月

鈴鹿市考古博物館

例 言

1. 本書は、鈴鹿市国分町字境谷に所在する境谷遺跡の第1次発掘調査の概要報告である。
2. 発掘調査は、鈴鹿市リサイクルセンター2期事業建設に伴う事前調査として鈴鹿市文化振興部考古博物館が実施した。
3. 調査の体制は、下記により実施した。

調査主体 鈴鹿市

調査担当 鈴鹿市 文化振興部 考古博物館

(組織及び構成)

鈴鹿市考古博物館館長

中森成行

埋蔵文化財主幹兼グループリーダー

藤原秀樹

埋蔵文化財グループ

副主幹

浅野隆司

主査

田中忠明

事務吏員

伊藤 淳 田部剛士

嘱託職員

吉田真由美 林 和範

服部英世 加藤拓也 吉田朋史

臨時職員

杉本恭子 永戸久美子 別府智子

加藤利恵 池田美和

4. 調査は、上記係員のうち、浅野、服部、加藤、吉田朋が担当し、伊藤、田部、吉田真、林の協力を得た。
5. 現地での調査期間は、平成18年8月7日から平成18年12月22日である。
6. 土工部門と図面作成については株式会社イビソクに委託した。航空測量・図化作業は株式会社アイシーに委託した。
7. 本書の執筆・編集は浅野、服部、加藤、吉田朋がそれぞれ分担して行った。
8. 座標は、世界測地系を用いている。
9. 遺構番号は、遺構の性格をあらわす記号の後ろに発見された順に番号を付けて3桁で示した。

S B : 掘立柱建物 S D : 溝 S H : 竪穴住居 S K : 土坑

10. 本調査にかかる遺物・図面・写真はすべて鈴鹿市考古博物館が保管している。
11. 調査及び報告書刊行にあたっては三重大学名誉教授八賀晋先生をはじめ、地元各位のご指導・ご協力を得た。記して感謝申し上げます。

本文目次

| | | |
|---|-----------------|----|
| 1 | はじめに | 1 |
| 2 | 位置と環境 | 1 |
| 3 | 弥生時代中期中葉から後葉の遺構 | 5 |
| 4 | 古墳時代後期の遺構 | 6 |
| 5 | 飛鳥・奈良時代の遺構 | 7 |
| 6 | 中世の遺構 | 9 |
| 7 | まとめ | 10 |

挿図目次

| | | |
|-----|-------------------|-----|
| 第1図 | 境谷遺跡周辺遺跡位置図 | 1 |
| 第2図 | 境谷遺跡周辺地形図 | 2 |
| 第3図 | 境谷遺跡第1次発掘調査 遺構配置図 | 3・4 |

写真図版目次

| | | |
|-------|---|----|
| P L 1 | 調査区周辺地形／調査区全景 | 11 |
| P L 2 | SH079 完掘／SH216 完掘／SH238 完掘／SH277 炭化物出土状況／SH329 完掘／SH382 完掘 | 12 |
| P L 3 | SK369 遺物出土状況／SK372 完掘／SH026 カマド遺物出土状況／SK005 遺物出土状況 SK326・346 遺物出土状況／SH019 完掘 | 13 |
| P L 4 | SH040・041・050 完掘／SH082 完掘／SH085 完掘／SH311・313 完掘／SH325 完掘／SK386 完掘 | 14 |
| P L 5 | SB349 完掘／SK098 遺物出土状況／SB241 完掘／SB370 完掘／SK365 遺物出土状況／ 現地説明会風景 | 15 |

1 はじめに

鈴鹿川下流域の左岸台地上には、旧石器時代～鎌倉・室町時代にかけての遺跡が多く存在している（第1図）。境谷遺跡（鈴鹿市遺跡番号542番）もその中のひとつで、遺跡の総面積は約9ha、弥生時代から平安時代にかけての遺物散布地として遺跡地図に登録されている。しかし、現在まで発掘調査が実施されることもなくその詳細な性格は不明であった。今回、鈴鹿市リサイクルセンター（廃棄物最終処分場）2期事業建設に伴い、遺跡のうち、2haがその対象となった（第2図）。そのため、平成17年度に範囲確認調査を実施し、平成18年から2か年で本発掘調査を実施することになった。

今回、平成18年度は第1次調査として、事業予定地の南半分約8,000㎡を対象に調査を実施した。調査期間は、平成18年8月7日～12月22日であった。調査終了後の、平成19年1月27日には市民を対象とした現地説明会を開催し、約90名の参加を得た。

2 位置と環境

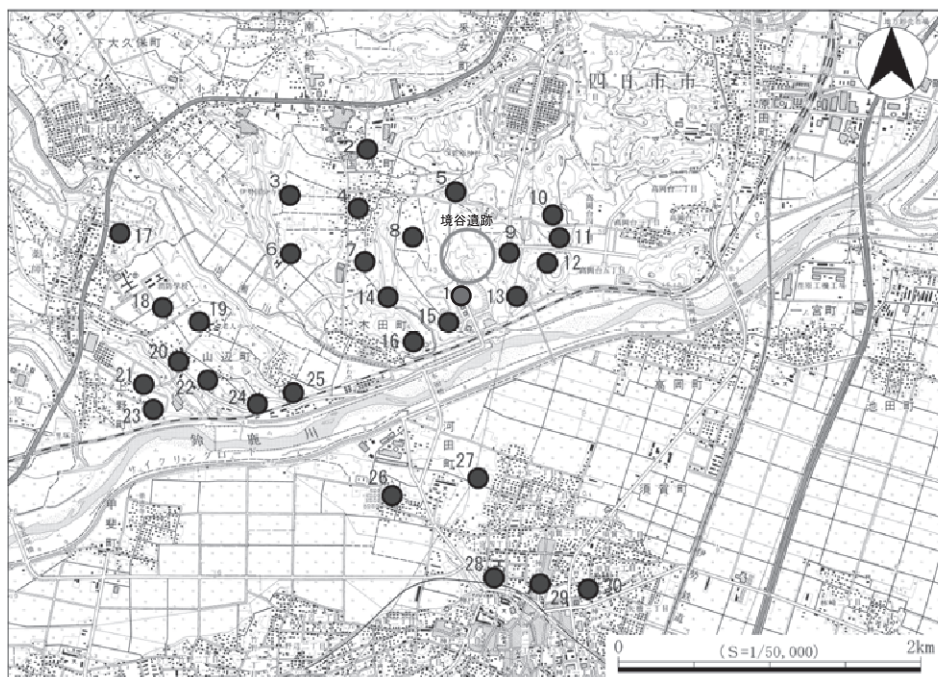
境谷遺跡は、三重県鈴鹿市国分町字境谷に所在する。立地は鈴鹿川左岸の台地（高位段丘：旧内部川扇状地）上で、標高は43～44mである。台地の南端は、鈴鹿川に削られ比高差約30mほどの崖をなしている。また、鈴鹿川からは小さな谷が入り込み、台地を分断している。現況は山林であるが、かつては畑として耕作されていた。

谷を挟んで、西側には、中尾山遺跡・古墳群、さらに西側には、沖ノ坂遺跡・古墳群が所在する。中尾山古墳群はかつて

13基、沖ノ坂古墳群は19基が確認されたが、現在ではほとんどが削平され、沖ノ坂古墳群の3基が墳丘を残すのみとなっている。両遺跡は、リサイクルセンターの第1期事業に伴い発掘調査され、中尾山遺跡では弥生時代中期の竪穴住居、方形周溝墓が多数検出されたほか、中尾山古墳群の一部と見られる方墳の周溝も確認されている。沖ノ坂遺跡でも弥生時代中期から古墳時代にかけての竪穴住居多数と方墳の周溝、古墳から奈良時代の土壇墓が確認されている。

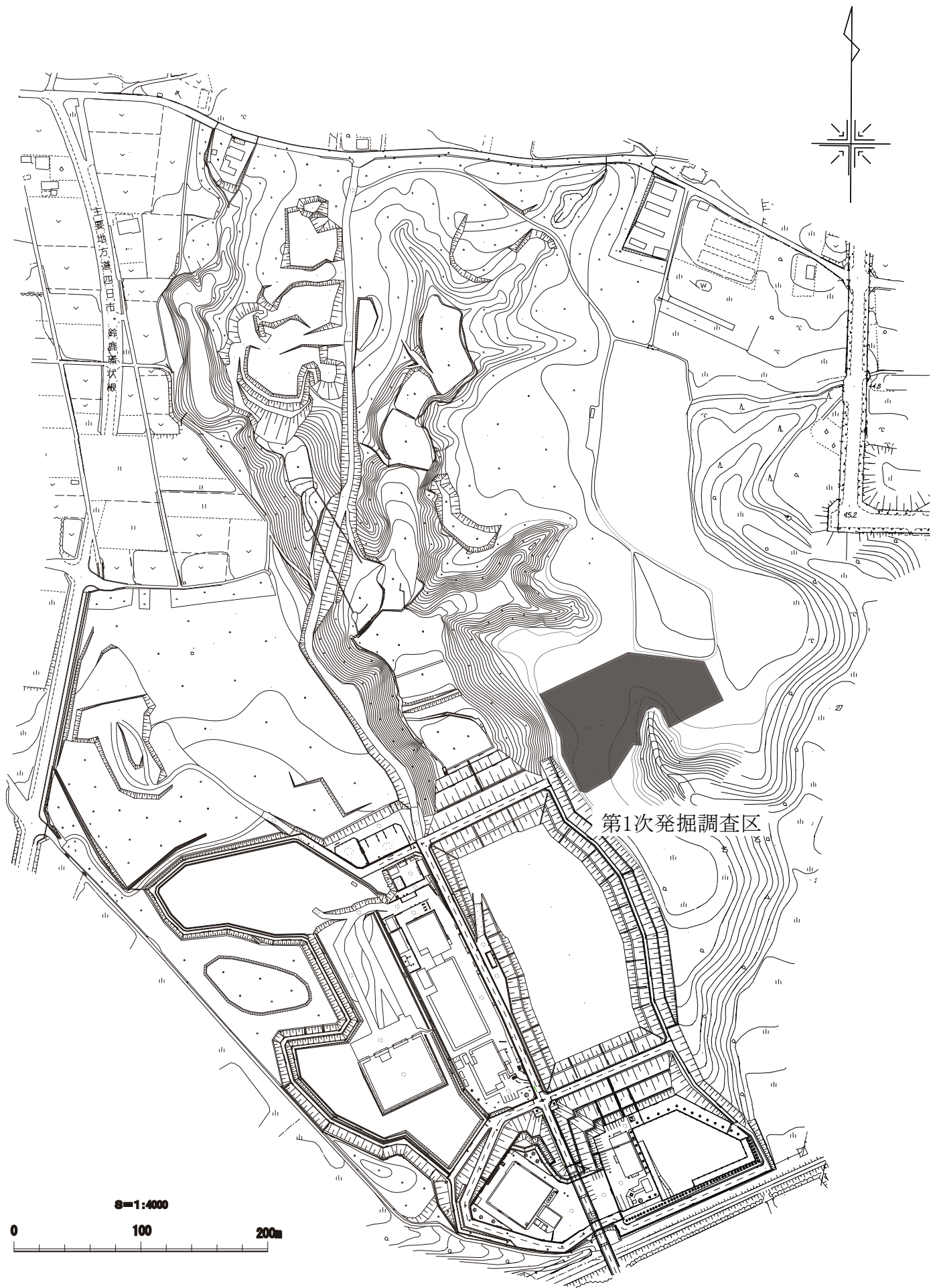
また、東の谷を挟んで、寺山遺跡・寺田山古墳群が所在する。寺山遺跡は道路建設、倉庫建設などによって現在までに7次にわたる発掘調査が行われている。北側の丘陵裾部に弥生時代中期の竪穴住居群が検出されているほか、台地全体に飛鳥から奈良時代にかけての竪穴住居・掘立柱建物群からなる集落が広がっている。寺田山古墳群は、現在6基が墳丘をとどめているが、台地先端に立地する寺田山1号墳は全長70mと市内では最大規模の前方後円墳で、4世紀後半から5世紀初頭の築造と考えられている。寺田山7号墳は、発掘調査され、木棺直葬の主体部を持ち、円筒埴輪列をめぐらせた円墳であった。周囲からは、削平により墳丘を失った小方墳の周溝が多数確認された。

境谷遺跡の立地する台地の奥部には、富士山古墳群が分布する。富士山1号墳は全長50mと鈴鹿川流域第2の規模を持つ前方後円墳で、未調査のため正確な時期は不明であるが寺田山1号墳に後続する首長墓とみられる。10号墳は全長20.5mと小型の前方後円墳であるが、円筒埴輪列をめぐらせる。築造は6世紀後半と見られている。（浅野隆司）

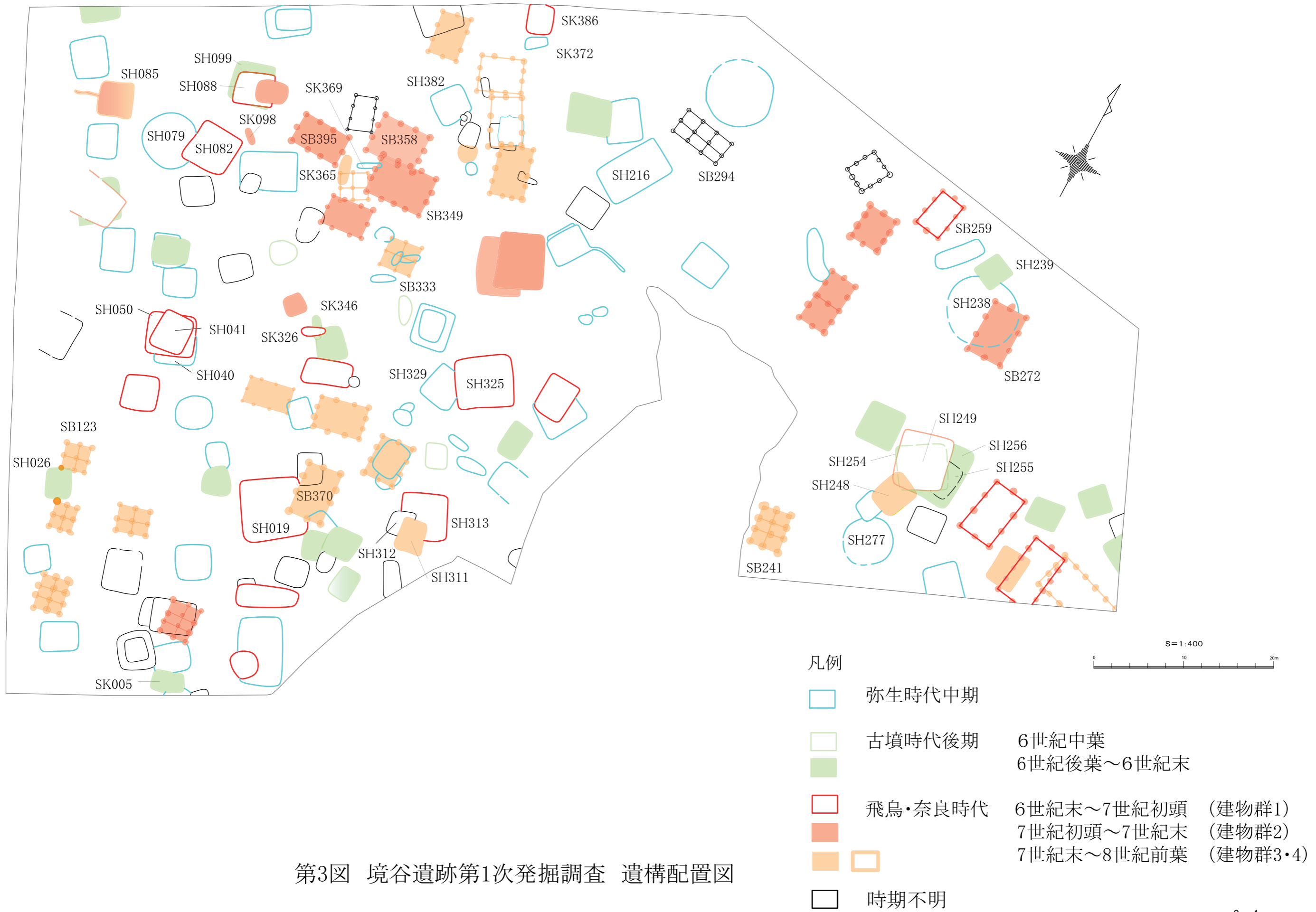


- 調査地（境谷遺跡）
- 1. 中尾山遺跡
- 2. 国分北遺跡
- 3. 伊勢国分寺跡
- 4. 国分遺跡（国分尼寺推定地）
- 5. 富士山1号墳
- 6. 狐塚遺跡（河曲郡衙）
- 7. 南浦遺跡（大鹿廃寺）
- 8. 国分東遺跡
- 9. 寺山遺跡
- 10. 扇広遺跡
- 11. 西ノ岡A遺跡
- 12. 西ノ岡B遺跡
- 13. 寺田山1号墳
- 14. 大鹿山1号墳
- 15. 沖ノ坂遺跡
- 16. 磐城山遺跡
- 17. 狐谷遺跡
- 18. 石薬師東古墳群
- 19. 中山古墳群
- 20. 口山古墳群
- 21. 若宮古墳
- 22. 南山遺跡・南山古墳群
- 23. 一反通遺跡
- 24. 山辺瓦窯跡
- 25. 山辺古墳群
- 26. 河田宮ノ北遺跡
- 27. 八重垣神社遺跡
- 28. 神戸中学校遺跡
- 29. 萱町遺跡
- 30. 須賀遺跡

第1図 境谷遺跡周辺遺跡位置図



第2図 境谷遺跡周辺地形図



3 弥生時代中期中葉から後葉の遺構

竪穴住居

竪穴住居は円形住居 5 棟、方形住居 29 棟の計 34 棟を検出した（第 3 図）。削平を受けているため床面直上で検出されるものが多く、残存状況はあまり良好でない。規模は、円形住居では床面積約 16.6～50.2 m²のものがあり、床面積 50.0 m²を越えるものも 2 棟検出した。なお、円形住居は検出した 5 棟すべてが焼失住居であるという特徴が挙げられる。方形住居では床面積約 8.4～39.2 m²までのものがあるが、床面積 20.0 m²以下の小型の竪穴住居が中心である。出土遺物は甕・壺が中心で、高坏の出土量は少ないのが特徴である。そのほかの出土遺物として砥石・石斧・石庖丁・石鏃・石剣などの石器、土玉などの土製品が出土している。以下に代表的な竪穴住居を述べることにする。

SH079 2 棟重複する竪穴住居で、SH082(6 世紀末～7 世紀初頭)より古い。平面プランはほぼ正円形を呈し、規模は直径約 7.0 m で床面積約 38.5 m²を測る。検出面においては炭化物が散っている状況を確認した。支柱穴と考えられるものは 3 基検出され、直径約 0.3～0.4 m、床面からの深さは約 0.2 m を測る。また壁から 0.8 m ほど内側に環状に並ぶ直径約 0.3 m、深さ 0.3 m 前後のピットが一定の柱間を測って位置することから、これらは支柱穴と考えられる。幅約 0.2 m、床面からの深さ 0.1 m ほどの壁溝が周囲に巡り、床面中央部には深さ約 0.3 m のすり鉢状の土坑を設けている。土坑の埋土には炭化物や焼土が混入していたが内面に被熱の痕跡などは見受けられなかった。遺物は壺・甕及び砥石が出土している。

SH216 平面プランは隅丸長方形を呈し、規模は長辺約 8.0 m、短辺約 4.9 m、床面積約 39.2 m²を測る。支柱穴と考えられるピットが認められなかった一方で、壁溝近くに直径 0.1 m にも満たないピットが等間隔で何基か認められた。このような状況から壁立式の住居であった可能性も考えられる。壁溝は幅約 0.1～0.15 m、床面からの深さ約 0.05 m の規模を測り、床面では一部硬化面が確認された。焼土は南よりに 2 箇所認められた。遺物は甕・壺などと共に蓋だと思われる土器片が出土している。

SH238 2 棟重複する竪穴住居で、SH239(6 世紀後葉～6 世紀末)より古い。南西側の一部は攪乱によって削平されている。また東側には SB272(7 世紀初頭～7 世紀末)の柱穴が並ぶ。平面プランはほぼ正円形を呈し、直径約 8.0 m、床面積約 50.2 m²を測る。他の円形住居同様、多量の炭化物が検出面におい

て認められた。住居内には大小様々なピットが存在するが、直径約 0.4 m、床面からの深さ約 0.5 m を測るピット 3 基が支柱穴だと考えられ、残りは攪乱によって削平されている。幅約 0.1 m、深さ約 0.05 m の細く浅い壁溝が巡るが南側の一部分では確認できなかった。他の円形住居で見られるような中央土坑は認められなかったが、支柱穴と同様に攪乱によって削平された可能性がある。遺物は甕・壺や石鏃などの石器が出土している。

SH277 平面プランはほぼ正円形を呈し、規模は直径約 5.5 m を測る。南側約半分ほどが削平されているため全体は明らかではない。他の円形住居同様、多量の炭化物が検出され、北東側では住居中央部から壁に向かって放射状に広がる炭化物が認められた。幅約 0.15 m を測るこれらの細長い材状の炭化物は住居の上屋部分が焼け落ちた状態をほぼ留めていると思われる。住居内には大小様々なピットが存在する。その内、壁から 0.9 m ほど内側に位置するピットが 6 基あり、全て直径約 0.3 m、深さ 0.3 m 前後を測る。またそれぞれ隣り合うピットとの距離はおおよそ 0.2 m 前後という値をとる。これらを結ぶと住居中央を重心とする正六角形に近い形を示すことから、6 本柱構造が想定される。或いはこれらは支柱穴ではなく支柱穴であり、他の直径がやや大きめのピットを支柱穴をして捉えるべきなのかもしれない。壁溝は幅約 0.15 m、床面からの深さ約 0.05 m を測る。中央土坑は平面長方形を呈し、西側に床面からの深さ約 0.15 m を測るテラス状の平坦面を持ち、東側では更に 0.3 m ほど下がる円形の掘り込みを持つ。土坑底面は平坦で埋土には炭化物及び焼土ブロックを含む。遺物は壺・甕及び石斧が出土している。

SH329 2 棟重複する竪穴住居で、SH325(6 世紀末～7 世紀初頭)より古い。平面プランは長方形を呈し、規模は長辺約 4.6 m、短辺約 4.1 m で床面積約 18.9 m²を測る。検出面からの深さは約 0.05 m と残存状況はあまり良好ではない。各隅はほぼ直角に曲がっている。支柱穴と思われる柱穴を 2 基検出し、2 本柱構造と考えられる。支柱穴の規模は直径約 0.2 m、床面からの深さ約 0.15～0.2 m である。壁際には幅約 0.15 m、深さ約 0.05 m の壁溝を、床面の北西隅においては壁溝から続く屋外に伸びる溝を設けており、排水溝と考えられる。また、床面中央部には地床炉を設けている。床面直上から壺・甕や石鏃・石剣・土錘がまとまって出土した。

SH382 平面プランは長方形を呈し、規模は長辺約 5.0 m、短辺約 4.0 m、床面積約 20.0 m²を測る。各隅は直角に近い角度で曲がる。支柱穴と思われる柱穴を 4 基検出し、4 本柱構

造と考えられる。住居隅を対角線で結んだ場合、各隅から約1.3 m離れた場所に直径約0.2 m、床面からの深さ約0.2～0.3 mの主柱穴が位置する。壁溝は細く浅く、ほぼ一定の幅と深さで周囲を巡る。床面中央よりもやや西に地床炉と考えられる焼土が確認された。また焼土付近からは土器小片が集中して出土した。遺物は甕・壺が出土している。

土坑

今回の調査では約40基の土坑を確認しており、内16基を遺構配置図に図示した。

SK369 平面プランは隅丸長方形を呈し、長軸約3.3 m、短軸約0.8 m、深さ約0.3 mを測る。断面形状は箱型を呈する。西側で一段テラスを設けている。また、北東隅床面では扁平な河原石が配置されていたため、土壌墓の可能性も考えられる。

SK372 平面プランは隅丸長方形を呈し、長軸約2.8 m、短軸最大約1.5 mを測る。東側には検出面からの深さ約0.2 mのテラス状の平坦面を持ち、直角に近い勾配をもって更に0.2 mほど下がる。北側及び南側も東側同様に直角に近い勾配をもって立ち上がるが、西側は東側とほぼ同じ高さに若干の起伏を持って緩やかに立ち上がる。底面にはやや凹凸が認められる。遺物は壺・甕などで埋土中層から下層にかけてやや集中して出土したが、不規則に埋まっていたことから廃棄土坑だと考えられる。また、線刻が施文された壺の破片が出土している。体部下半1/4周程度しか残存していないため断定はできないが、鳥の足が描かれていると思われる。

(加藤拓也・吉田朋史)

4 古墳時代後期の遺構

竪穴住居

6世紀中葉から末にかけての竪穴住居は18棟検出した。平面プランは方形である。規模は、床面積約8.2～57.7 m²までのものがあり、小型・中型の竪穴住居が中心である。出土遺物は甕・壺・甌などの土師器や、甕・壺・坏身・坏蓋・高坏などの須恵器が中心である。その他の出土遺物としてSH256から鉄滓が出土している。この住居は5棟の竪穴住居が重複しているうちの1棟である。出土遺物から検討すると、うち4棟の住居は時期に継続性があり、SH255→SH256→SH254→SH249と建て直しの可能性が指摘できる。SH088・SH099についても同様の可能性がある。また、カマドを設けた竪穴住居を9棟検出した。以下では、代表的な竪穴住居を述べることにする。

SH026 SB123(7世紀末～8世紀前葉)と重複する竪穴住居で、SB123より古い。平面プランは方形を呈し、規模は長辺約4.2 m、短辺約3.4 mで床面積約14.3 m²を測る。検出面からの深さは約0.3 mと残存状況は良好である。各隅は、ほぼ直角に曲がっている。主柱穴と思われる柱穴を2基検出し、2本柱構造と考えられる。主柱穴の規模は直径約0.3～0.4 m、床面からの深さ約0.3 mを測る。壁溝は把握するに至らなかった。西壁にはカマドを設けている。カマドの右側には口縁部から肩部が残存している大型の甕2個が上部が開くように配置されており、器台的な役割をしている。さらにその下部はレンズ状に掘り窪められており、甌片が破損した状態で出土している。また、床面中央部よりやや南西に大甕の胴部から底部が潰れた状態で出土した。その他の出土遺物は、土師器・須恵器が中心である。時期は6世紀後葉から末の所産と考えられる。

土坑

今回の調査では約10基の土坑を確認しており、内訳は6世紀中葉のものが2基、6世紀後葉から6世紀末にかけてのものが4基、残りは詳細な時期が不明である。この内4基を遺構配置図に図示した。

SK005 平面プランは隅丸長方形を呈し、長軸約6.8 m、短軸約4.8 m、検出面から深さ約0.3 mを測る。断面形は箱形を呈し、底面は平坦で東側には更に約0.2 m下がる不整形の掘り込みを持つ。掘り込み部分からはほとんど遺物が出土していないという状況から、SK005より古い別の遺構である可能性もある。埋土下層から比較的多量の遺物が出土しており、平面的には東側でまとまって出土している傾向にあった。出土遺物としては、土師器片、須恵器坏身・坏蓋・大甕などが挙げられるが、これらは不規則に埋まっていたことから廃棄土坑だと考えられる。時期は6世紀中葉から後葉の所産と考えられる。

SK346 SK326(6世紀後葉～末)より古い土坑である。残存している掘り方から平面プランは楕円形、断面形は船底形を呈する。規模は、長軸約2.8 m、短軸約1.5 m、深さ約0.4 mを測る。遺物は土師器・須恵器でハソウや坏身が出土している。時期は6世紀後葉の所産と考えられる。

(加藤拓也・吉田朋史)

5 飛鳥・奈良時代の遺構

竪穴住居について

飛鳥・奈良時代の竪穴住居は18棟検出した。内訳は6世紀末から7世紀初頭のもの12棟、7世紀前半のもの2棟、8世紀前葉のもの4棟である。規模は床面積約12.3～49.0㎡までの小型・中型の竪穴住居が中心である。また、この時期の竪穴住居にはカマドが設けられているものが多く、この時期全体で9棟検出した。出土遺物は甕・甌などの土師器や、甕・坏身・坏蓋・短頸壺・高坏などの須恵器が中心である。中には暗文土師器や岸岡山古窯産の須恵器、刀子などの鉄製品も出土している。

土坑について

今回の調査では約20基の土坑を確認しており、内訳は6世紀末から7世紀初頭のもの8基、7世紀初頭から7世紀末のもの6基、7世紀末から8世紀前葉のもの7基である。この内11基を遺構配置図に図示した。

掘立柱建物の時期について

掘立柱建物の時期については、出土遺物が小片で数が少なかったため、まず棟の方位によるグルーピングをした後に、他の遺構との重複関係や出土遺物の時期を検討し、現段階での案を示したい。

棟の方位を基準とすると、大きく分けてふたつのまとまりがみられる。ひとつは、ほぼ正方位を向く建物群である。N3°-W～N8°-E、N90°-W～N94°-Wの間にあり、全体でみると最大で11°ほどの振れ幅がある。これらはさらに、建物群1(N3°-W～N1°-E、N90°-W～N94°-W)と建物群2(N7°-E、N8°-E)の2つの群に細分できる。

もうひとつは、正方位から少し西に振れる建物群である。これらも、建物群3(N7°-W～N17°-W、N113°-W)と建物群4(N24°-W～N29°-W)の2群に分けられる。

掘立柱建物群の全体の時期に関しては、6世紀末～7世紀初頭の遺物が出土した竪穴住居(SH019)と重複するものがあることと、奈良時代前期の遺物が出土した廃棄土坑(SK365)があることから、両時期の間に収まると考えた。

次に、柱穴からの出土遺物を検討すると、

- ① 建物群1のSB259から7世紀初頭(TK209併行期)の須恵器坏蓋が出土した。
- ② 建物群1・2からは7世紀後葉(飛鳥IV期)以降の遺物は

出土していない。

- ③ 建物群3から飛鳥IV期以降と考えられる暗文土師器が出土した。

- ④ 建物群3と建物群4の前後関係は不明である。

ことなどが判った。

なお、建物群1と建物群2の前後関係についても遺物の検討からは明らかにならなかった。しかし、居住形態が竪穴住居から掘立柱建物へ変化することを念頭に置くと、棟数の少ない建物群1が竪穴住居群と並存していると推定できる。よって建物群1を建物群2に先行するものと考えた。

以上のことから、判断材料は少ないが、掘立柱建物群の時期については、建物群1は6世紀末～7世紀初頭、建物群2は7世紀初頭～7世紀末、建物群3・4は7世紀末～8世紀前葉と考えられる。

なお、掘立柱建物の棟数については、さらに検討することにより増える可能性が高い。

6 6世紀末から7世紀初頭

竪穴住居

SH019 3棟重複する竪穴住居でSH309(6世紀末～7世紀初頭)・310(弥生中期中葉)より新しい。平面プランは隅丸方形を呈し、規模は一辺約7.0mで床面積約49.0㎡を測る。検出面からの深さは、約0.4mと残存状況は良好である。今回の調査で見つかった方形住居では最大規模である。各隅は緩やかな弧を描いて湾曲している。主柱穴と思われる柱穴を4基検出し、4本柱構造と考えられる。主柱穴の規模は直径約0.5～0.6m、床面からの深さ約0.5～0.6mを測る。壁際には幅約0.15m、深さ約0.05mの壁溝を設けている。また、北壁中央部には幅約1.6mの大型のカマドが設けられ、一部煙道が残存している。遺物は、土師器や須恵器で、甌・高坏・坏蓋・壺や、砥石などの石器や刀子と考えられる鉄器も出土している。

SH041・050 SH041は3棟重複する竪穴住居で、SH050(6世紀末～7世紀初頭)・SH040(弥生時代中期中葉～後葉)より新しい。平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺約4.5m、床面積約20.0㎡を測る。主柱穴と思われる柱穴を4基検出し、規模は直径約0.3m、床面からの深さは約0.2～0.4mを測る。壁際には幅約0.15m、床面からの深さ約0.05mの壁溝を設ける。北壁中央よりやや西側にはカマドが設けられ、一部煙道が残存する。またカマド東隣には南北方向に長軸を持つ深さ約0.2mの長方形の土坑があり、更に東隣にあたる住居北

東隅にはほぼ完形の須恵器坏身が出土した円形のピットを設ける。遺物は土師器や須恵器坏身・壺などが出土している。

SH050 は大部分が SH041 に壊されおり、住居壁と壁溝が確認されたに留まる。平面プランは隅丸方形を呈し、一辺約 5.0 m、床面積は約 25.0 m²と推定される。SH040 に比べ各隅は直角に近い角度で曲がる。壁際には幅約 0.2 m、床面からの深さ約 0.1 m の壁溝が設けられている。遺物は土師器や須恵器坏身・甕などが出土している。

SH082 2 棟重複する竪穴住居で、SH079(弥生時代中期中葉～後葉)よりも新しい。平面プランは隅丸方形を呈し、規模は一辺約 5.0 m、床面積約 25.0 m²を測る。主柱穴と思われる柱穴を 4 基検出し、4 本柱構造と考えられる。主柱穴の規模は直径約 0.25～0.3 m、床面からの深さ 0.3 m 前後、それぞれの柱間は約 3.0 m を測る。壁溝は幅約 0.3 m、深さ約 0.2 m の規模を保ちながら周囲を巡るが、各隅では他の部分より内側に向かってやや幅が太くなる。北壁中央よりやや東にカマドが設けられ、煙道も一部残存する。住居南東隅には浅い不整形の掘り込みを持つ。遺物は土師器甕、須恵器甕・坏身・岸岡山古窯産と思われる短頸壺が出土している。

SH085 平面プランは方形を呈し、規模は長辺約 4.5 m、短辺約 4.0 m で床面積約 18 m²を測る。検出面からの深さ約 0.3 m と残存状況は良好である。各隅はやや直角に曲がっている。主柱穴と思われる柱穴を 3 基検出し、残り 1 基については把握するに至らなかったが、4 本柱構造と推定される。主柱穴の規模は直径約 0.2～0.4 m、床面からの深さは約 0.15 m である。壁溝は幅約 0.15 m、床面からの深さ約 0.05 m で、西壁中央付近から西側の谷の方へ伸びている。このため、排水溝と考えられる。遺物は土師器の皿が出土したが、小片のため詳細な時期は判明しなかった。

SH312・313 SH312 は 3 棟重複する竪穴住居で、SH311(7 世紀末～8 世紀前葉)より古く SH313(6 世紀末)より新しい。平面プランは隅丸方形を呈し、規模は一辺約 3.0 m で床面積約 9.0 m²を測る。検出面からの深さは約 0.05 m と残存状況は良好ではないため、主柱穴や壁溝については把握するに至らなかった。そのため、竪穴住居ではなく、土坑の可能性もある。出土遺物が土師器片のみのため時期は検討中であるが重複関係より、6 世紀末から 7 世紀初頭の遺構と考えられる。

SH313 は SH311・SH312 より古い。平面プランは隅丸方形を呈し、規模は長辺約 6.1 m、短辺約 5.3 m で床面積約 32.3 m²を測る。各隅は緩やかな弧を描いて湾曲している。主柱穴と考えられる柱穴を 4 基検出し、4 本柱構造と考えられる。主

柱穴の規模は直径約 0.2～0.3 m、床面からの深さ約 0.2～0.3 m を測る。壁際には幅約 0.15 m、深さ約 0.05 m の壁溝を設けている。また、北壁中央部にはカマドを設けている。カマドの炊口より奥側で、甕が直立した状態で出土した。出土状況より、カマドの支脚もしくは廃絶時に配置されたものと考えられる。出土遺物は、土師器や須恵器坏身などがある。以上のことより SH313→SH312→SH311 の順で住居が営まれていたと考えられる。

SH325 2 棟重複する竪穴住居で、SH329(弥生時代中期中葉～後葉)より新しい。一部、攪乱溝により削平を受けている。平面プランは隅丸方形を呈し、規模は長辺約 6.6 m、短辺約 6.5 m で床面積約 42.9 m²を測る。検出面からの深さは約 0.25 m と残存状況は良好である。各隅は、緩やかな弧を描き湾曲している。主柱穴と思われる柱穴を 4 基検出し、4 本柱構造と考えられる。主柱穴の規模は直径約 0.20～0.25 m、深さ約 0.30～0.35 m を測る。壁際には幅約 0.3 m、床面からの深さ約 0.1 m の壁溝を設けている。出土遺物は、土師器や須恵器坏身・坏蓋がある。

土坑

SK326 SK346(6 世紀後葉)と重複している土坑で、SK346 より新しい。平面プランは楕円形、断面形状は逆台形を呈する。規模は長軸約 2.8 m、短軸約 1.8 m、深さ約 0.3 m を測る。底面からは完形の短頸壺が出土しているため、土壙墓の可能性も考えられるが、枕石などが配置されていないため土坑とした。その他の出土遺物は、土師器や須恵器が中心である。

SK386 平面プランは隅丸方形、断面形状は船底形を呈する。規模は長軸約 3.6 m、短軸約 3.3 m、深さ約 0.35 m を測る。底面は多少ではあるが凹凸がみられる。遺物は土師器、須恵器で底面から頸部が欠損したハソウや完形の坏身が出土している。

7 世紀初頭から 7 世紀末の遺構

掘立柱建物

SB349 桁行 4 間(約 6.7 m)、梁行 3 間(約 4.6 m)で、床面積は約 30.8 m²である。棟の方位は N-91° -W で建物群 2 に属する。柱穴の掘り方は円形で、規模は直径 0.5 m 前後、深さは 0.4 m ほどである。北側の柱筋が SB395 と揃っている。

柱穴が SB358 のものと一部が重複しており、SB358 より古いことが確認できた。

SB358 桁行 3 間(約 6.0 m)、梁行 3 間(約 4.5 m)で、床面積は約 27.0 m²である。棟の方位は N-91° -W で建物群 2 に属す

る。柱穴の掘り方は円形で、規模は直径0.5 m前後、深さは0.4 mほどである。

SB349 と SB358 の先後関係や周辺の建物配置からは、2 もしくは3 回にわたる建て替えを想定できる。

土坑

SK098 平面プランは隅丸の長方形で、断面形は逆台形を呈する。長軸は約2.6 m、短軸は約0.7 mで、深さは約0.3 mの土坑である。出土遺物は少なかったが、北端から0.6 mほどの位置の床面直上から、7世紀後葉（飛鳥Ⅲ期もしくはⅣ期）の須恵器坏身に蓋が被さった状態で出土した。状況からほぼ原位置を保っていると考えられる。副葬品と考えられることから、土壙墓の可能性もある。

7世紀末から8世紀の遺構

竪穴住居

SH311 3棟重複する竪穴住居で、SH312・313(6世紀末～7世紀初頭)より新しい。平面プランは隅丸方形を呈し、規模は一辺約3.1 m、床面積約9.6 m²を測る。検出面からの深さは約0.1 mと残存状況は良好でない。北壁にカマドを設けている。なお、支柱穴や壁溝などは把握できなかった。出土遺物は、土師器や須恵器が中心である。

掘立柱建物

SB241 桁行3間(約4.6 m)、梁行2間(約3.6 m)、床面積は約16.6 m²の総柱建物である。棟の方位はN-7° -Wで建物群3に属する。柱穴の掘り方は隅丸方形で、一辺の長さは0.8 m前後、深さは0.4～0.5 mほどである。

今回の調査で確認できた中では、最も大型の倉庫と考えられる。

SB333 桁行2間(約3.8 m)、梁行2間(約3.6 m)、床面積は約13.7 m²の総柱建物である。方位はN-4° -Wで建物群3に属する。柱穴の掘り方は円形で、規模は直径0.4 m前後、深さは0.4 mほどである。他の総柱建物に比べ柱穴が小さく浅いため、小規模な倉庫と考えられる。

この建物とSB391は、建物配置や構成、規模などから、建物群4の前身もしくは建て替えられたものと考えられる。

SB370 桁行3間(約5.5 m)、梁行2間(約4 m)で、床面積は約20.0 m²である。棟の方位はN-7° -Wで、建物群3に属する。柱穴の掘り方は円形もしくは隅丸方形で幅は約0.6～0.8 m、深さは概ね0.5 mほどだが、棟持柱は0.2 mほど浅い。

今回の調査で見つかった中では、最も大きな柱穴をもつ側柱建物である。

土坑

SK365 平面プランは長楕円形で、断面は半円形を呈する。長軸約3.8 m、短軸約1.0 m、深さ約0.4 mである。須恵器の坏B・坏蓋・壺・甕や土師器の坏(暗文)・甑・甕などの遺物が出土した。これらの時期は、奈良時代前期(平城Ⅰ期もしくはⅡ期)に比定できる。

多種多量の遺物が不規則に埋まっていたことから、廃棄土坑と考えられる。

(服部英世・吉田朋史)

6 中世の遺構

SB294 桁行3間(約6.3 m)、梁行2間(約3 m)で、床面積は約18.9 m²である。柱穴の掘り方は円形で、規模は直径約0.25 m、深さは0.15 mほどである。他の掘立柱建物に比べて柱穴は小さく浅いが、柱筋が通る。そのため、明確な時期を示す遺物は出土しなかったが、中世の建物と推定した。

なお、詳細な検討ができなかったので図示はしていないが、SB294の周囲に方形に巡る溝がある。山茶碗が出土しているため、区画溝である可能性も視野に入れて分析を進めたい。

(服部英世)

7 まとめ

今回の発掘調査で、境谷遺跡は弥生時代中期及び古墳時代後期から飛鳥・奈良時代の複合遺跡であることが明らかになった。約 8,000㎡という大規模な発掘調査からそれぞれの時代の集落の変遷や村の構造を考える上で重要な資料を提供してくれたことが成果として挙げられる。

弥生時代

竪穴住居について 弥生時代中期中葉から後葉の段階で、竪穴住居の形が円形から方形に変化している。また今回見つかった弥生時代中期の円形住居はすべて焼失住居である。このことは、同じ時期の方形住居との比較検討や他地域の類例を見る必要があるが、現段階では火災により焼失した可能性もあるが、意図的に燃やされた(廃絶祭祀)ことも考えられる。

集落の変遷について 平成2年度に、谷をはさんだ西側の丘陵上で中尾山遺跡や沖ノ坂遺跡が調査されており、弥生時代中期中葉の竪穴住居 55 棟、中期後葉の方形周溝墓 22 基が検出されている。境谷遺跡は中期中葉から後葉が主体であるので、中尾山遺跡に並存・後続する集落と考えられる。現在のところ境谷遺跡では墓域が発見されていないため、中尾山遺跡が墓域として利用された可能性も考えられる。また、同じ丘陵上に沖ノ坂遺跡や寺山遺跡などほぼ同時期にあたる集落が営まれ、谷からの豊かな湧水などを生活基盤として、丘陵の中で集落の移動が行われていたのではと考えられる。

古墳時代

鈴鹿川下流の左岸では、古墳時代後期の集落の調査例は周辺に存在する古墳群に比べると意外に数が少ない。この境谷遺跡の周辺でも、沖ノ坂遺跡・中尾山遺跡・寺山遺跡・磐城山遺跡で、古墳時代の集落跡が発見されているが、いずれも規模としてはそれほど大きいものではない。この境谷遺跡では、古墳時代後期の遺構として、竪穴住居が 18 棟検出されている。中には、数棟重複しているものもあり、建て直しが行われたのではないかと考えられる。また、カマドを設けている住居が多くカマドが普及していることがうかがえる。集落周辺の遺跡では、谷を隔てた台地上に中尾山古墳群が造られており、時期的にも同時期であることから、この集落を支配した人が葬られたとも考えられる。

飛鳥・奈良時代

掘立柱建物のうち側柱建物は住居、総柱建物は倉庫だと推定される。また、棟方向が南北や東西を向くかたちで建てられており、いくつかのまとまりを持ってある程度の規則性が

みられる。この時代には、一部竪穴住居もあるが、数量的に見ると古墳時代後期に比べ、減少することなどから、住居の様式が竪穴住居から掘立柱建物へと移行する時期ではないかと考えられる。掘立柱建物は飛鳥時代から建てられはじめたことは確認できたが、詳しい存続時期については今後の検討を要する。この時期の土坑から発見された遺物から見て、少なくとも奈良時代までは建てられていたのではないかと考えられる。(浅野隆司)

史料と境谷遺跡

境谷遺跡は旧伊勢国河曲郡に属する。郷名は定かではないが、現存する地名をもとに各郷を比定してゆくと、中跡郷か駅家郷に属する可能性が残る。

河曲郡は古代氏族大鹿氏の本貫地であったと考えられており、『日本書紀』には敏達4年(西暦575年)正月条に、采女である伊勢大鹿首小熊の娘、菟名子夫人が2人の皇女を生んだことが記されている。この時期は、境谷遺跡で集落が再び営まれ始めた時期にあたるが、今回の発掘調査では王権との関係を推定しうる特別な遺物や遺構などは見つかっていない。古代豪族としての大鹿氏の性格を暗示している可能性がある。(服部英世)

今後の展望・課題

現段階では、整理途中のために遺構や遺物の時期区分が明確にされていないものも多数残されている。そのことについては今後さらに詳細な検討をすることで明確にしていきたい。

また、引き続き来年度も調査を行うことにより、さらに各時期の集落的様相が明らかになるであろう。

(吉田朋史)

主な参考文献

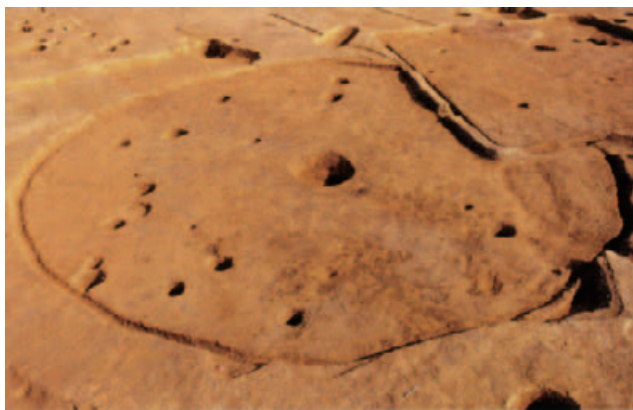
- ・坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋 1965 『日本書紀』下 岩波書店
- ・池辺弥 1970年 『和名類聚抄郷名考証』吉川弘文館
- ・鈴鹿市教育委員会 1980 『鈴鹿市史』第一巻
- ・鈴鹿市考古博物館 1989 『発掘された鈴鹿』
- ・鈴鹿市考古博物館 1991 『発掘された鈴鹿』
- ・岡田登 1996 「伊勢大鹿氏について(上)」 『史料』皇學館大學史料編纂所
- ・鈴鹿市教育委員会 1998 『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報V』
- ・鈴鹿市考古博物館 2000 『鈴鹿市考古博物館年報1』
- ・三重県 2006 『三重県史』資料編 考古1
- ・藤原秀樹 1995 「岸岡山2号窯跡の須恵器について」 『海の考古学』鈴鹿市教育委員会



調査区周辺地形



調査区全景



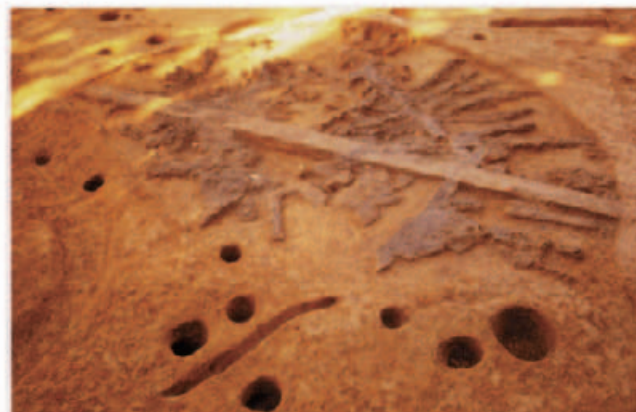
SH079 完掘（南西から）



SH216 完掘（南から）



SH238 完掘（東から）



SH277 炭化物出土状況（南東から）



SH329 完掘（南から）



SH382 完掘（北西から）



SK369 遺物出土状況（南東から）



SK372 完掘（西から）



SH026 カマド遺物出土状況（西から）



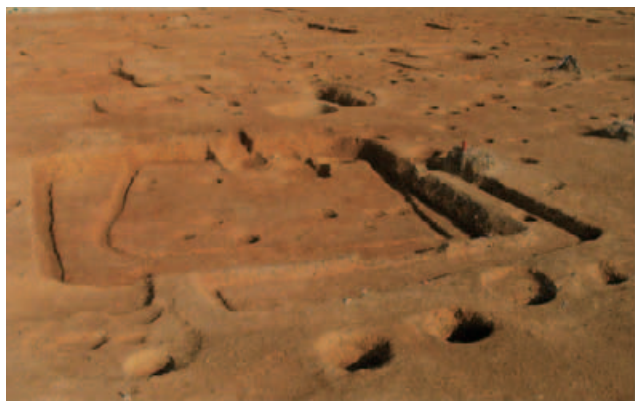
SK005 遺物出土状況（南から）



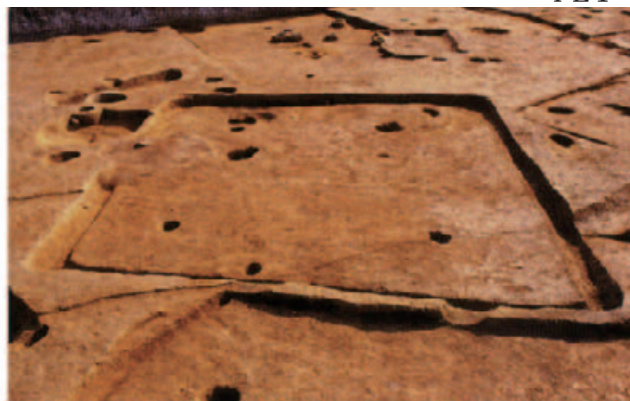
SK326・346 遺物出土状況（南から）



SH019 完掘（南東から）



SH040・041・050 完掘（南東から）



SH082 完掘（西から）



SH085 完掘（東から）



SH311・313 完掘（南から）



SH325 完掘（南東から）



SK386 完掘（北西から）



SB349 完掘（北から）



SK98 遺物出土状況（南東から）



SB241 完掘（北から）



SB370 完掘（西から）



SK365 遺物出土状況（南から）



現地説明会風景

報 告 書 抄 録

| ふりがな | さかいだにいせき だいいちじはくつちょうさ がいようほうこく | | | | | | | | |
|------------------|--|-------|------------------------------|-----------------------|---------------------------------|--|---------------------|---------------------|--|
| 書名 | 境谷遺跡 第1次発掘調査 概要報告 | | | | | | | | |
| 編著者名 | あさのたかし ほっとりひでよ かとうたくや よしたともふみ 浅野隆司 服部英世 加藤拓也 吉田朋史 | | | | | | | | |
| 編集機関 | 鈴鹿市考古博物館 | | | | | | | | |
| 所在地 | 〒513-0013 ^{すずかしこくぶちょう} 三重県鈴鹿市国分町224番地 TEL059(374)1994 | | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2007年3月31日 | | | | | | | | |
| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 | |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | | |
| さかいだにいせき 境谷遺跡 | すずかしこくぶちょうあざさかいだに 鈴鹿市国分町字境谷 | 24207 | 542 | 34° 54' 15" | 136° 34' 40" | 2006/8/7～ 2006/12/22 | 8080 m ² | リサイクル センター 建設 | |
| | | 種別 | おもな時代 | おもな遺構 | おもな遺物 | 特記事項 | | | |
| | | 集落跡 | 弥生時代 古墳時代 飛鳥時代 奈良時代 | 竪穴住居 掘立柱建物 土坑 溝 | 弥生土器 土師器 須恵器 石鏃 石斧 石庖丁 | 弥生時代中期の竪穴住居34棟、 古墳時代後期の竪穴住居18棟が 検出された集落跡 | | | |

境谷遺跡 第1次発掘調査 概要報告

—三重県鈴鹿市国分町字境谷 所在—

編集・発行 鈴鹿市考古博物館
〒513-0013 三重県鈴鹿市国分町224番地
TEL: 059-374-1994
FAX: 059-374-0986
E-mail: kokohakubutsukan@city.suzuka.lg.jp
URL: <http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/>

印 刷 有限会社 三鈴印刷

Sakaidani Site 1st Excavation
Preliminary Report

March, 2007

Suzuka Municipal Museum of Archaeology